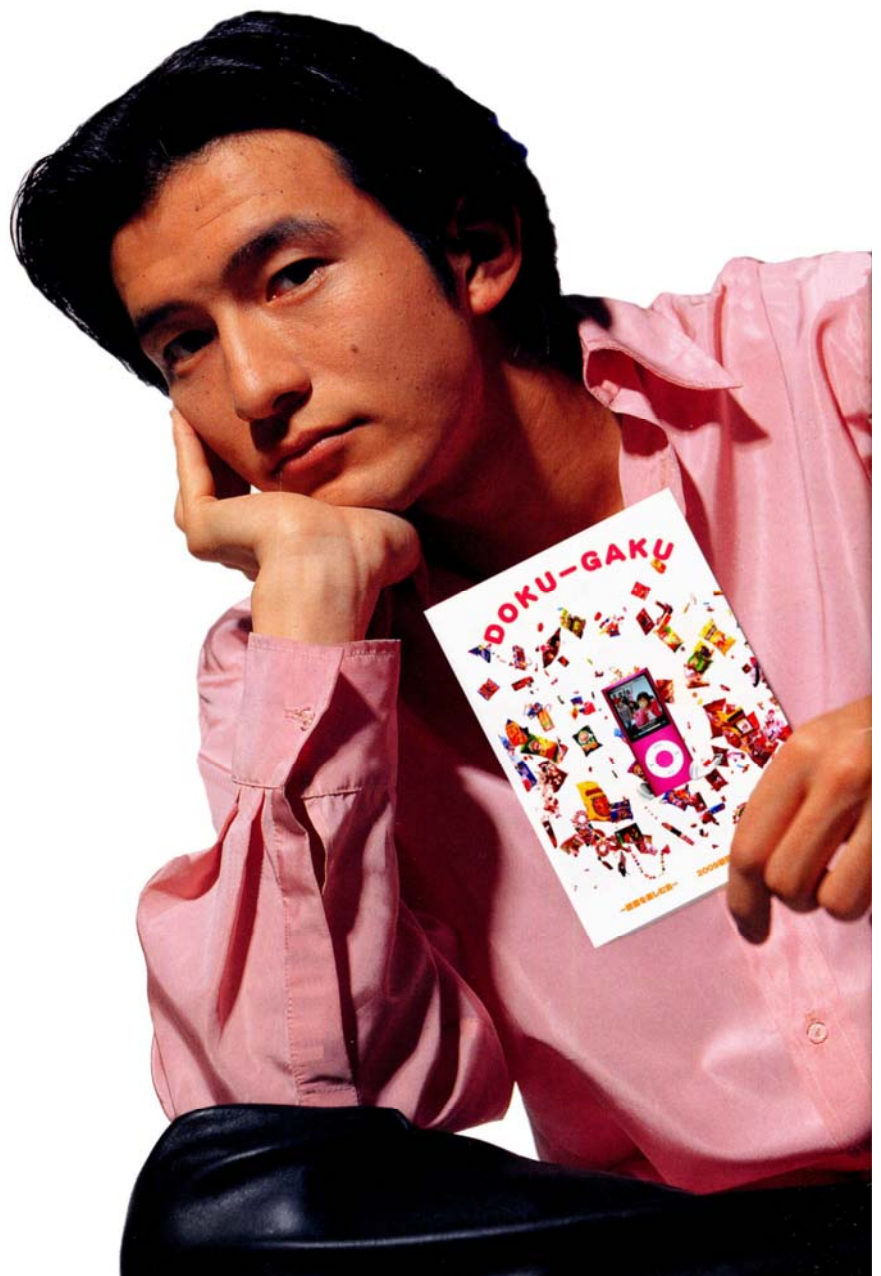


読書リスト



今月の DOKU-GAKUチョイス!!

著者 天童荒太

善と悪、生と死が交錯する『永遠の仔』以来の感動巨編。全国を放浪し、死者を悼む旅を続ける坂築静人。彼を巡り、夫を殺した女、人間不信の雑誌記者、末期癌の母らのドラマが繰り広げられる。

週刊誌記者・蒔野が北海道で出会った坂築静人（さかつき・しずと）は、新聞の死亡記事を見て、亡くなった人を亡くなった場所で「悼む」ために、全国を放浪している男だった。人を信じることが出来ない蒔野は、静人の化けの皮を剥ごうと、彼の身边を調べ始める。やがて静人は、夫殺しの罪を償い出所したばかりの奈義倅世と出会い、2人は行動を共にする。その頃、静人の母・巡子は末期癌を患い、静人の妹・美汐は別れた恋人の子供を身籠っていた――。

静人を中心に、善と悪、愛と憎しみ、生と死が渦巻く人間たちのドラマが繰り広げられる。著者畢生（ひっせい）の傑作長篇。（楽天ブックスHPより）

悼む人



天童荒太

T I C A

最初の5ページで面白いと思った。静かな人の話を私としては珍しくゆっくり読んだ。事故や事件で人が亡くなった場所を訪ね歩き、故人のことを忘れないと胸に刻む静人。一悼む人。重い話を重く書く天童荒太の直木賞受賞作品。

二国沿いを歩いていると道路わきに花が飾られているのをよく眼にするが、ここで事故があったという事実を思うだけでその状況や、ましてや人物にまでは思いが至らない。

坂築静人は亡くなった人が「誰に愛され、誰を愛し、どんな感謝をされたか」を遺族や知り合いに尋ねながら、一人一人の生きた証を胸に刻み、決してそのことを忘れないと誓う。そして忘れてしまうことを罪のように恐れる。忘れたくないなら、遺族の憤りにも耳を傾けてそのときの感情を思い出した方がいいように思うが、死を公平に悼むためにまだ遺族の感情までは抱えきれないのだろう、ある意味割り切って淡々と死に向かい合う。

3年前の作品「包帯クラブ」はこの人には異色な感じがしていた。でも、心や身体が痛い思いをした場所に包帯を巻いて行くという行動を起こした高校生も「悼む人」と同じところにいると思えた。ただ「包帯クラブ」の万人向きに比べて「悼む人」は人それぞれがまるで違うことを感じる本だとは思う。

この話は、悼んで歩くということが異質でそちらに目が行ってしまうが、自分が主役じゃない人生を想像できること、自分以外の人の人生にとっては自分はわき役だという認識を

持っていることの大切さを伝えようとしているように思った。そういうことに思いを馳せることが出来ない人が悲惨な事件を起こすような気がする。

坂築静人のこうでありたいと望む静かだけど強い気持ちは高さではなく一直線みたいな感じがする。一人一人の死に対して、悼みを公平にするために殺された人と殺した人を同じ死にしないように自分の中でルールを作る。自分が幸せになること、人の死を忘れてしまうことを恐れる。生きているのと同じに死にも公平なことはないし、そうある必要もないと思ってしまう俗っぽい私はそんな生き方が怖かったり疎ましかったりと思う気持ちも否めない。「永遠の仔」の誰かに褒めてほしい、認めてほしいと足掻く主人公たちのほうが私には近いのかもしれない。

この本を読んだ多くの人と同じように私も、自分の死後<誰を愛し、誰に愛され、誰に感謝されたか>と訊かれた私の知り合いはどう答えてくれるのかと想像してみた。私には子供がいるからどうしても愛という子供の出番になりそうだけど、感謝となると…。私は誰に感謝されている？子供には健やかに生きていることに感謝しているけれど、私の親がそれだけのことで私に感謝してるとはとても思えないし、そもそも感謝すること事態、宗教を持たない私は誰にたいしてしているのかさえも定かじゃない。

でも、もっと小さな具体的な感謝、ありがとうと言ったそれが感謝だとしたら、<その人のためになら自分が少しくらい損をしてもいいって思えたらそれはもう、愛>だとしたら、感謝や愛なんて結構溢れてるじゃん、と思える私は少しは幸せな人間なのかもしれない。

閣下

天童荒太の書く話は全て基本方向が悼むって状態で、今までは人の裏側や闇の部分が書けていたのに、この本のように性善説みたいなのが加わっちゃったら聖書読んでる方がまし。

健

読み終えて非常に感想の書きにくい作品だった。死について真剣に見つめて書かれたものであり自分自身を重ねて書こうとすると頭で考えている事とふだんの行動に矛盾がありすぎて自分でもよく分からなくなる部分が多いからだ。

自分は次男だが実質は長男。嫁さんはいないので一人暮らし。本当の長男は2歳で死亡。両親はすでに他界しているので自分が位牌のお守りをしている。死=無と割り切っている。特に宗教心は持っていないが一応、朝は自分の口に物を入れる前に水・食べ物を供え明かりを灯している。長男は自分が生まれる以前に亡くなっているので感傷のようなものは無いが名前ぐらいはと思い浮かべながら拝んでいる。自分の死後は自分のことなど忘れてもらっても一向に構わないと考えているので作品の「悼む人」を必要としないが一方では路上に花あれば悼む気持ちは湧くし、無縁仏に手を合わせたりもする。法事に招かれることも多くなり両親の事で知らなかったことを聞くともっと知りたいと思うこともある。自分の死後、唯一気がかりなのは位牌の事、墓の事などだが自分の子に任せられないのは親不孝かなあとも思っている。肉親でさえこういうケースは多々あるので「悼む人」の行

為は忘れられた人の死を刻むとはいえ、親元を離れ死亡記事を収集し「悼む」ために全国を回るといのは異常に思える。巡礼・修行僧と考えれば何の違和感もないが作者は宗教と一線を画し純粋な行為として描きたいようだ。違和感の理由は宗教的なものが無いのなら死に眼を向けるより生きる方に眼を向けるべきと思うからだ。現代は情報社会でもあり悲惨な死亡情報も多々眼にする。悼む気持ちはあるがそれほど深く感傷的にならないこともある。時々薄情なのか想像力の欠如なのかと思うこともあるがその都度、真摯に死を受け止めていたら心が壊れてしまうと思う。人は最愛の人を失っても食わずに生きては行けない。悲嘆にくれて殉死に近い死に至る人もいないわけではないがそうならないために人は「悼む」という行為でそれを避ける。肉体は滅びても魂は残るとか生前を思い心に住ませることで死別の痛みを和らげる。「千の風になって」が大ヒットしたのも死が万人に共通の出来事だからだろう。本題の「悼む人」だがストーリーは全編を貫く一本の糸に主人公「悼む人」を据え、各章毎に特異な人生を持つ雑誌記者・母親・随伴者を絡ませ主人公の称する「悼み」の実態が明らかにされてゆく。登場人物たちはその行為に対しはじめは否定的でディベートをするかのように意見を述べ、批判する。これにより死に対するそれぞれの考えが掘り下げられ次第に「悼み」に対し理解を示してゆく構成になっている。自分も作者の術中にはまり、その都度自分の思うところと小説の中の人物と議論するかのごとく読み進めていた。この作品は構想年月、巻末の参考資料の多さでもわかるように練りに練られた作品であると思う。冒頭自分が感じたことを含め一般の人が思う考え方、批判・肯定などの意見はそれぞれ登場人物の語りに割り振られて網羅されている。不満なのは脇役の強い個性に比べ主人公に重みが無く現実感が伴わないせいか脇役の繰り出す批判に対し一応の回答を用意しているものの淡々としていて物足りない。察するに作品のキーワードは母親が息子(悼む人)の行為の是非を問われ言う「あの子をどう思うか？」ではなく「あなたがどう思ったか？あなたの心に何が残ったか？」ではないかと思う。作品のテーマが重いだけに何が正しいという訳ではなくそれぞれ読者が思うところに沿って答を出せば良いとの示唆であると思う。そう考えると小説には起承転結の「結」が必要というもののラストで主人公の意思を理解し後継者が現れる形を示唆して結着としたのは安直な気がするし「悼み」という行為が純化されすぎているのもひっかかる場所である。いろいろ書いてはきたが作品自体はプロローグから引き込まれるものがあり自問自答することの多い作品だった。

Cacco

なんだかずいぶん年を取ってしまったようで、自分に残された大きな仕事は「いかにうまく死ぬか」ではないかと思うときもある。死ぬことに上手いも下手もなく行き当たりばったりになるのは当たり前だと思いつつ、上手く死にたいなあと考える。年を取ると(若いときにだってある人にはある。そうじゃなかっただけ自分はラッキーだったとも言える)大切な人との別れも経験しなければならない。生きていく上でとても必要だった人との別れもある。ふとしたときに「ああもうあの人はいないんだ」と再認識し

たりする。そういう気持ちとは別に、ときどき亡くなった人について誰かと話したいという欲望にかられる。その人がどんな人でどんなふう生きて何が好きで自分とどんなふう接してきたか。もし坂築静人に出会って、「誰を愛し誰に愛されどんなふう感謝されたか」と問われたら、その人について話すことはたくさんたくさんあるだろうと思う。小説の冒頭の女子学生は友人の死の目撃者になり、学校へも通えないひきこもり生活を送っていたが事件現場で偶然静人に出会い心情を吐露し救われる。小説には他にもさまざまな身近な人を亡くした人々が静人に出会い話す場面が描かれている。小説のストーリー云々でなしにこの場面はすべて好きでジンとくる。誰もみな大切な人を失った人々はその思いを語りたけれど、語るべき相手がいないことに落胆しているのではないか。せめて自分は誰かが語りたと思った時、誰かの話を聞ける人でありたいと願っているのだけれど。

小説のテーマのひとつに「公平な死」ということがあると思う。戦争、事故、事件等で亡くなった人のなかにも、多くの人の心に刻まれた人もいれば、だれにも顧みられることなく眠っている人もいと静人は言う。かれは分け隔てなく死者を悼むことを自分の生涯かけてのやるべきことだとある日思い至り、放浪の旅の中でその思いを再確認していく。公平にあらゆる人の死を悼もうと思ったなら、静人のような生活をせざるを得ない。生活のすべてが「死」と係わり、亡くなった人たちの人となりを訪ね、亡くなった場所を訪ね、祈りを捧げる。公平であることを目指すことは自分を捨てなければできないことなのだと思う。静人にはなれないし、なりたいたとも思わないが、静人のような存在は大切な人を失った淋しい誰かの心をやわらげることができるだろうとは思っている。残された人たちにとって静人の存在は必要なのだ。

小説のラストで静人はこんなことを言う。「ある人の死を詳しく知った誰かが、そのつど心に刻んでくれればと、夢のように願うことがあります」。小説では週刊誌記者の蒔野がその願いを叶える人のひとりになるのだろう。小説を読むにあたってこの蒔野に感情移入して読んだ。最初は静人の行動を売名か宗教かと疑う蒔野が次第に静人に惹かれていき、静人の心を受け継ぐラストは未来への希望が感じられる。

こういう「死」をテーマにした作品が賞を取り多くの人に読まれ評価されるということは今の世の中、死は案外誰にとっても身近なものなのかと妙な感慨も覚える。生きている以上、死は誰にでもやってくる。これ以上に絶対で公平なものはない。わたしたちは皆失った大切な誰かをいつも心に刻んでいる個人的な「悼む人」であり、そしていずれ「悼まれる人」になる。誰かがときどきわたしを思い出してくれたら。



次号DOKU-GAKUチョイスは「**おくりびと**」です。映画「**おくりびと**」を観られた方も「**納棺夫日記**」をお読みの方も感想お寄せください。これからもみんなでひとつのテーマで語り合しましょう。次号もよろしく！

001 健

No.	読書日 2009年	タイトル	著者 出版	表紙	コメント	評価
1	0127- 0127	ひとつ 屋根の下	野島伸司 扶桑社文庫 500円 (300円)		昼間、part2の再放送をしているのを見てところどころセリフやストーリーの流れに納得できないところがあり前作と併せ古本屋で購入。ドラマもインターネットで見られることがわかったので夜中に一気に鑑賞。結局、昼はCMが通常より多く入るためその分カットされていたことが分かって納得。ドラマの内容は両親を事故で亡くし、ばらばらの家族に引き取られていた6人の兄弟が紆余曲折を経て一つ屋根の下に暮すようになる。その後も兄弟の絆を裂くような事件が続発。兄弟の結末で乗り越える話。新喜劇を現代風にアレンジして寅さんのギャグを盛り込んだもの。小説のほうはギャグの部分はそぎ落とし台詞役を若干入れ替えてすっきりした形にノベライズ。	
2	0128- 0128	ひとつ 屋根の下 part2	野島伸司 ワニブックス 1,365円 (350円)		前作「告白」に続いて刊行されたもの。高2の由紀と敦子は転入生から聞いた自殺の目撃話を聞き人の死ぬ瞬間を見たいと思うようになり。それぞれ死に近い場所である老人ホームと病院へボランティアで参加する。友達でありながら微妙な関係の二人。それぞれの場所で出会う事件が互いの行動に繋がっていくストーリー。「告白」と同系統なのが気になる前作と違って友情物語に変化する爽やかな部分があるかと思えば悪意を残すという後味の悪さが残るのは作者の癖か。	
3	0203- 0205	少女	湊かなえ 早川書房 1,470円 (950円)		Caccoさんから貰った本。数学者である著者が、天才数学者—ニュートン、関孝和、ガロワ、ハミルトン、コワレフスカヤ、ラマヌジャン、チューリング、ワイル、ワイルズ—九人の足跡を現地に行きついで迎い、かつての栄光と人生模様を描く。どうせならさわりだけでもいいから知的興味の湧くようなエピソードも加えて欲しかった。	
4	0205- 0206	天才の栄光 と挫折	藤原正彦 文春文庫 540円 (0円)		アウトローの世界を通じて描く人間模様が阿佐田哲也の魅力だがそれを支えているのが氏のギャンブル人生で身に付けた勝負の哲学、技術論だったがこの作品にはそういう部分が抜けてしまっていて物足りない。	
5	0206- 0209	ゴールドラッシュ	阿佐田哲也 小学館文庫 530円			

6	0210-0211	毒殺魔の教室	塔山 郁 宝島社 1,470 円 (950 円)		30 年前に「6 年 6 組」で起きた児童毒殺事件の真相を、証言や手紙・小説などを通してあぶり出していく犯罪サスペンス。証言者によって、まったく異なった見解をもつこの事件。取材者が情報を見聞きするたびに、事件は思わぬ形に変化してゆく。「告白」「少女」を読んだばかりで同系統は食傷気味だが完成度ならこの作品のほうが上かと思うが悪意のある作品が続くと気が重くなる。
7	0212-0213	定年外事刑事	柘治郎 徳間文庫 520 円		タイトルとこてこての大阪をイメージさせるイラストでコメディものか人情ものと想像して読み始めたら思いのほかハードボイルド・タッチ。大阪は韓国と縁の深い土地柄であるが国際的な事件に発展するなどイメージとのギャップに戸惑わされるがなかなか楽しめる作品。
8	0214-0215	星の見える家	新津きよみ 光文社文庫 580 円		著者はTVドラマ「トライアングル」の原作者。再会、再婚、再発、再起、再建、再来、再生など「再び」をテーマとして大人の女性を描いた 7 つの短編集。キャプションに傑作心理サスペンスとあるように普通のドラマと見せてミステリーの仕掛けがしてあるがこの人ならストレート勝負の作品でもよいのではと思う。
9	0215-0216	鬼の囃音	角川G パブリッシング 道尾秀介 1,470 円 (880 円)		ふとしたはずみに心の闇に入り込む残酷な情念が引き起す事件のやりきれない結末。6 本の短編が収められているがどれも重苦しい話ばかりで読後感は沈む。
10	0217-0219	映画 「黒部の太陽」 全記録	新潮文庫 熊井啓 740 円		「黒部の太陽」が封切りされたのが 1968 年。自分が高1の時。映画の看板はリアルタイムで見ているが作品のほうは見そこなっている。当時、横山まさみちが漫画化しているのでストーリーは知っている。この作品と「栄光への 5000 キロ」は映画館で見て欲しいとの裕次郎の遺言で封切り以来、再上映もDVD化もされていない幻の映画となっている。今年フジテレビの 55 周年記念番組でTVドラマ化されたり、富山のイベント(4/4)で 1 日だけの 3 時間 15 分の完全上映されることで再上映の気運が高まるかもしれない。本書はシナリオの「完全版」に加え撮影秘話とスチール写真をふんだんに配した貴重な記録本。

11	0219-0220	ビッグコミック 創刊物語	プレジデント社 滝田誠一郎 1,600 円		ビッグコミックは1968年4月の創刊で当時は平綴りの月刊誌。当時ビッグネームだった白土三平、手塚治虫、石森正太郎、さいとうたかを、水木しげるの5人に破格のページ数を与えて連載するという触れ込みだったので漫画ファンに衝撃的な出来事だった。この本は創刊の準備期間から始まる秘話・エピソードや現代も長期連載作品を生み出しているコンセプトにも触れていて興味深く読める本。
12	0225-0302	悼む人	文芸春秋 天童荒太 1,700 円 (0 円)		今号のDGチョイスの一冊。Cacco さんが買ったものを回し読み。コーナーに感想文を投稿。
13	0225-0227	待ってる 橘屋草子	講談社 あさのあつこ 1,680 円 0		「バッテリー」などスポーツをする少年の成長ものを主体に書いている作家なので時代劇はどうかと思って読んでみた。ストーリーは深川の料理茶屋「橘屋」に奉公する12歳のおふくの成長物語。市井ものとしてはオーソドックスだが元妾だった仲居頭のお多代が厳格ながらも情を隠した人物として好感が持てまあまの作品。
14	0228-0302	本日 サービスデー	光文社 朱川湊人 1,785 円 (1,070 円)		世界中の人間に、それぞれに一日だけ、すべての願いが叶うサービスデーがある。神様がくれる特別な一日だが本来は教えてもらえないその日を知った主人公の行動を面白味に悲哀を加えて描いた表題作を含め少しの幸せ感と毒を含んだ短編集。ラストは概ねハッピーな終わり方なので少々物足りないけど暗い作品が多い中、たまにはこういうのもいいかも。
15	0310-0317	木もれ陽の 街で	文春文庫 諸田玲子 590 円		昭和26年の荻窪。戦争が終わり徐々に活気を取り戻しつつある時代。中流家庭とはいえ良家の長女、公子は丸の内の商社に勤めているが崩れた魅力を持つ画家の片岡と知り合い惹かれて行く。恋愛が制限されていた時代の切なさは典型的な昭和の恋物語だが終章では衝撃のしかけがある。当時の武蔵野の風景が丁寧に描かれていて穏やかな雰囲気味わえる作品でもある。

005 TICA

題名	著者	感想
告白	湊かなえ	<p>わが子を亡くした女性教師が、終業式のHRで犯人である少年を指し示す。ひとつの事件をモノローグ形式で「級友」「犯人」「犯人の家族」から、それぞれ語らせ真相に迫る。第29回小説推理新人賞受賞作。</p> <p>「ジョーカーゲーム」「悼む人」とともに本屋大賞のノミネート10作のうちの1作。内容がブラックなので本屋大賞っぽくないから<取らない>に1000点。</p> <p>元々は第一章の教師の告白の短編で賞を取り、単行本にするのに連作形式で話を増やしたと記憶している。あとからつけた話とは思えないほど、流れはよくできているし、テンポが速い。ただ後味はまるでよくない。</p>
オリンピックの身代金	奥田秀朗	<p>昭和39年夏、10月に開催されるオリンピックに向け東京は冠たる大都市に変貌しようとしていた。この戦後最大のイベントの成功を望まない国民は誰一人としていないような風潮だった。そんな中、東京で相次いで爆発事件が発生。同時に「オリンピックを妨害する」という脅迫状が当局に届けられた。警視庁の刑事たちが事件を追うと一人の東大生が捜査線上に浮かぶ。「昭和」を舞台にテロリストと刑事の戦いを描く渾身のサスペンス大作。</p> <p>吉川英治文学賞受賞（吉川英治文学新人賞は「ジョーカーゲーム」\(^o^)/）</p> <p>『サウスバウンド』ではもと過激派のお父さんが南の島へ引っ越してそこでも闘っていた。今度はオリンピックの中止を求めて命がけで闘う大学生が主役。</p> <p>日本が変わった時期、東京オリンピック。ミュンヘンオリンピックのテロやモスクワの棄権のようにオリンピックに政治が絡むなんて知りもせず純粋に勝負を楽しんでいた。そのころの大学生をオトナになってから思うと、よく話をして真面目に日本を変えようと思っていた特別な時代って印象がある。でも、就職が決まって髪を切ってきたとき、もう若いさと言いつつから、ただのおじさんの道まっしぐら。ただのおじさんも、好きですが。ふぁろーふぁろー^_^;</p>

人形になる	矢口敦子	<p>夏生は人工呼吸器なしでは生きられない。ある日入院してきた瑞江と、彼女の恋人の双一郎と出会う。それまで、ベッドに縛りつけられているだけだった人生の可能性を瑞江たちは広げてくれた。そして夏生は双一郎に恋をした…。解説の萩尾望都氏をして、「私のSFアタマもまたざわめく」と驚嘆せしめた矢口敦子の原風景。1997年度女流新人賞受賞作。</p> <p>萩尾望都さんを信じたのがいけなかった…。</p>
ラットマン	道尾秀介	<p>姫川はアマチュアバンドのギタリスト。高校時代に同級生3人とともに結成、30歳を超え、姫川の恋人・ひかりが叩いていたドラムだけが、彼女の妹・桂に交代した。そこには僅かな軋みが存在していた。姫川は父と姉を幼い頃に亡くしており、二人が亡くなったときの奇妙な経緯は、心に暗い影を落としていた。ある日、練習中にスタジオで起こった事件が、姫川の過去の記憶を呼び覚ます。——事件が解決したとき、彼らの前にはどんな風景が待っているのか。新鋭作家の新たな代表作。</p> <p>以前から読みたかった人。期待が高かったというのを差し引いてもつまらなかった。</p>
おくりびと	百瀬しのぶ	<p>チェロ奏者の大悟はオーケストラの解散で失業し、故郷の山形に帰る。「旅のお手伝い」という求人広告。それは、ご遺体を棺に納める納棺師の仕事だった。納棺師としてさまざまな人びとの別れに立ち会ううちに、自らの生き方にも目覚めていく大悟だったが、やがて彼の身近でも……。</p> <p>登場人物が映画の役者と広末涼子以外はぴったりだと思ってたら、原作じゃなくノベライズ本でした。</p> <p>主人公は昔の友人にも妻にも納棺師という仕事を蔑まれ、反対される。DG幽霊会員その2のがみちゃんのうちは葬儀屋さんで、息子には継がせたくないって前に言っていたのを思い出した。</p> <p>映画は見えていないけれど、話がたいしたことないからもっくんの仕草の美しさばかりに眼が行き、泣けるのは文章の方じゃないかと思いました。</p>

<漫画>

前回 Cacco さんが絶賛していたよしながふみさん、ほんとに面白い！

アンティーク（1～4巻）よしながふみ

きのう何食べた？（1～2巻）よしながふみ

ゲイのカップルの食日記。料理担当の主役の弁護士笈史朗（43才）が最高にいい。お金をかけずに食事を作り（一か月の食費二人で2万5千円）そのレシピも書かれている。

料理を作ることは楽しいだと思わせてくれた。読んでいるときは、よし、これを作ろうと思ったのが何品もあった。読んでいるときは、…ね。

※およそ漫画らしくないこんな題名が並びます↓

鮭とごぼうの炊き込みごはん／いわしの梅煮／たけのこがんとこんにやくの煮物
／栗ごはん／トマトとツナのぶっかけそうめん／鶏肉のオープン焼き／ナスとトマトと豚肉のピリ辛中華風煮込み／いちごジャム

20世紀少年（1～22巻）21世紀少年（1～2巻）（注：ネタバレややあり）

あとのページで Cacco さんが鋭い批評を書くと思うので、私は無責任な感想だけを。



1966年に放送された『忍者ハットリくん』のモノクロ実写版は子供心にひどく不気味だった。その不気味さを記憶しているからハットリくんのお面をつけている子に「ケンヂくん、あそぼー」と言わせるぞわぞわ感が効いてくる。昭和の原風景や言葉や遊びも登場人物と私の年齢が近いからその辺りも共通性があった。

Cacco さんから借りる際に、Cacco さんがすでに読んでいた麻生に「ともだちって誰だかわかった？」とひそひそ訊いていたので印象の薄い登場人物も意識して読んでいた。つまり。途中までは自分の推理に満足行くともだちの正体だったのに、最後の何ページかでわかった新たなともだちの名前に、隣で熟睡していた麻生を起こして「〇〇くんて誰？」と訊いてしまった深夜3時。

8年に渡って連載されたものを読んでいた読者には理解力と記憶力と忍耐力が必要。私は三日間で読んだくせに疑問に思うことも、いいところで話が二十年くらい飛んだりするので疑問自体を忘れてしまう。生まれ変わりがあつたり、バーチャルの子供時代と交差したり、話を追うだけでいっぱいいっぱいでもともだちの正体を推理するのは諦めた。正体がわかっててもそれが誰だかわからなかったのだから、もっと早く諦めればよかった。。

話とは直接関係のないサイドストーリーは面白かったけど、小学校の時にナショナルキッドのお面をつけている少年が短い期間でも二人もいたってことはかなり記憶に残るんじゃないの？という基本的な疑問を始め、長すぎるわりにわからないところ（長すぎるから余計にわからなくなる？）が多い。『しんよげんの書』だの二人目の**ともだち**だのはいらなかったんじゃないかと思う。身も蓋もないことを言ってしまえば、二人目の**ともだち**が出来るきっかけがあまりにもちいさすぎる。

なんでも小さな一歩から始まるのはわかるけど、それにしたって…。ねえ…。



©CHAGI BRASAWA/SHOGAKUKAN

麻生は映画も第一章、第二章と見に行っていてとても熱心でちゃんと理解もしているようで私の疑問にもすぐに答えてくれる。この力が違うところで発揮出来れば…という考えはしまっておいて、麻生が言うには**ともだち**は双子という説もあるとのこと。そんなのただのヨタ話かと思いきや、その理由も話してくれた。私は半分くらいしかわからなかったけど、わかったふりして聞いていた。驚くことに、映画では**ともだち**が違う人らしい。漫画を読んでわからないから映画を観ようと思うのは余計にややこしくさせるだけのこと。気をつけましょう。



<雑誌> GALAC



好きな人がいると聞いたこともない雑誌を買うことになる。それがマイナーだと丸善にも有隣堂にも売っていない。アマゾンでは発売当日に早々売り切れていて中古本が高値で出ている始末。仕方ないので雑誌販売専門のところから取り寄せた。おかげで普通に買うよりも380円も高いものになりました。たった3ページのために。

4月から始めるラーメンズの全国ツアー。そこでは36年かからなければ作れなかったものを見せてくれるそう。

た～のしみ♪♪♪

005 Cacco

猫を抱いて象と泳ぐ 小川洋子 文藝春秋

王様のランチの松田さんが「すでに今年度の最高傑作！」と絶賛するので思い切って買ってしまった！いつもの小川さん節だと思う。登場人物はいつもせつなくはかなげで内向的だ。大きくなりすぎてデパートの屋上から降りられなくなった象のインディラ、いつもチェステータブルの下にうずくまっていた猫のポーン、ボールを追って壁のすきまから抜けられなくなった少女ミイラ、太りすぎて住居のバスから出られなくなったチェスの師匠。そして主演のリトル・アリョーヒンはチェステータブルの下でしかチェスを指せないために大きくなることを拒否した青年だ。

短編集「夜明けの縁をさ迷う人々」に出てくる生涯をエレベーターの中で過ごし、エレベーターから出た途端に息絶えるエレベーターボーイに似ている。かれらは陥った宿命を呪うわけでもなくそこに自分の居場所を見つける。その思いがやけにせつない。チェスの話だけれどももちろんチェスを知らなくても大丈夫。チェスを知って読んでみたらもっと面白いんだらうか？松田さんの今年度最高！っていうのには賛成しかねるけれど、こういう傾向の本が好きな人には楽しめると思う。



偶然の祝福 小川洋子 角川文庫

小説家である「私」の語りで綴られる短編連作。世界中が自分に背を向け誰も自分を愛さず自分の小説など誰も読んでくれないのではないかという恐ろしい発作に時折襲われながら、レトリバーのアポロと幼い息子との3人で暮らすシングルマザーである小説家の私。この「作家」はやっぱり小川洋子さん自身だと思ってしまう。少なくとも彼女の母親は何がしかの宗教に没頭していて彼女には弟が実際にいるのだらう。そのまるで私小説のような現実感と時折出てくる非現実的なエピソードとかが絡み合い不思議な世界を作り上げている。中でも「キリコさんの失敗」が面白い。彼女は「私」の少女時代にいたお手伝いさんで、なくしたものを取り戻す名人だった。そしみつけた物を「私」に握らせ恩着せがましくなく「本来あるべき場所に戻っただけ」とつぶやく。もうひとつ「涙腺水晶結石症」もとてもいい。ある激しい雨が降りしきる日、犬の具合が悪くなり病気の犬と5ヶ月の息子連れて「私」は雨の中を動物病院へと急ぐ。雨は激しさを増し、立ちすくむ3人の前にすうっと黒塗りの車が現れ、中から降りてきた人は「獣医です」と名乗る。ストーリーをどんなに書いても作品のよさはどうやら語れない。本当なのか本当でないのかその境界があやふやなところが作品の大きな魅力になっている。身動きさえできなくなったときに差し伸べられる「偶然の祝福」。今まで数多く小川作品を読んできたけれどこの作品が一番好きかもしれない。



ホテル・アイリス 小川洋子 幻冬舎文庫

これはなんたってエロティック。主人公の少女は海辺のホテルで母親とふたりひっそりと暮らしている。母親は粗野で少女とはそりが合わず、大好きだった父親は早くに亡くしている。そんな少女が初老の翻訳家と出会い・・・「まぶた」という短編集にこの作品の短編バージョンが載っている。なぜこの作品にこんなエロい描写が必要なのかよくわからない。作家は必然として書いているのだろうと思うけれど、最初にこういう作品と出会ったら作家を誤解してしまいそうだ。



深き心の底より 小川洋子 PHP文庫

初期10年間のエッセーをまとめたもの。5つの章に分かれ、第5章「家族という不思議」は小川洋子初心者としてはなかなか興味深い。子育て、犬育てについてはまったく同感(両方ともこっちが育てられてるようなものです)。祖父母、両親とも金光教の信者で第6章「神の存在を感じる時」では「精神を支える背骨としての金光教が自分の身体に移植されていたような気がする」と記している。また自身の読書体験にも触れ、村上春樹、ポール・オースターの名前がたびたび登場してくるのはうれしい。やっぱりな、的感覚あり。他にたか号乗組員だった佐野三治さんの「「たったひとりの生還『たか号』漂流27日間の闘い」柳田邦男さんの「犠牲(サクリファイス)」とかは読んでみようと思った。エッセーを読むところや次で読む本を示してくれるときがあって、それもうれしい。タイトル「深き心の底より」からもわかるように小川さんという小説家も心の奥を掘って掘って作品を作り上げるタイプらしい。地面に立てたポールに巻きついたようなものより穴を掘っていくタイプの作品が好きだなと思う。



告白 湊かなえ 双葉社

これも王様のランチおすすめ本。あんまり面白いと松田さんがいうので健ちゃんにリクエストして借り受けました。「聖職者」「殉教者」など6つの章に分かれそれぞれ語り手が変わり、ひとつの事件に係わった人たちの告白によって描かれている。まあとにかく読みやすいので一気に読める。読後感はといえば、バトルロワイヤルのようにみんながむやみに殺し合う。復讐、軽蔑、嘘、嫌悪、いじめ、負の感情ばかりが目につく。こんな本を面白がっていいのだろうか？創作物なんだから面白く読めさえすればいいってこの本は今あんまり読む気にならないだと再認識。復讐をするということは負の連鎖しか産まないってことを教訓とすればいいのかな。ついランチを見てると松田さんに影響されてしまう自分。あんまり先の時間もないかもしれない。本も厳選しなければ。



きらきらひかる 江國香織 新潮文庫

息子の彼女が一番好きと言っていたのでチャンスがあったら読んでみたいと思っていた。どうもいまどき恋愛小説は好きくないなんていう枠をはずさないといろんな本を読めないものね。

で、面白かった。10日前に結婚したばかりの夫婦には他人には言えない事情があった。それはつまり妻はアル中、夫はホモで愛人あり、ということなんだけれど。妻・笑子のイメージはヒットエンドランの鳥居なんとかって人。

エキセントリック極まるような女性とは暮らしにくいだろうと思うけれど、お互いスネに傷持つ身、ふたりはすこぶるうまくいっている。そこに両家の両親たちがからんできて…結果は、「李さん一家」的にまとまる。現実っていうのはこういうケースでなんとなく行くんじゃないかな。この小説は妻が夫を愛している比率が高いんだと思う。純愛小説という括りで宣伝するより純愛を超えた小説とかのほうがいいんじゃないかしら。このだんなみたいなタイプは好みなので、わたしが笑子だったらもっとだんなとうまくやれる気がするけどな。



つめたいよるに 江國香織 新潮社

21篇収めた短編集。短いものは2、3ページで。ついでだからもう1冊読んでみました。「デューク」というのは犬の名前。デュークが死んだ次の朝、主人公の女性は電車の中である男の子と出会う。その男の子が、感謝を伝えにきたはデュークだったんだというお話。そんなことが現実にあったらうれしいだろうけれど、我が家のライ隊員にそこまで望んでいない。読みやすくちょっと感傷的な気分になるけれど、さらっと読めすぎて印象に残らない。小川洋子さんのほうがもっとしつこくてねちやねちやしてて汚い。で、汚いんだけど美しいってところがよいんだな。



20世紀少年 浦沢直樹 小学館 漫画

全22巻と上下巻、一気に読んだ、文句言いながら…。映画の予告がバンバンテレビで流れている頃から、今更こういうストーリーって面白いのか？とは思っていた。「ともだち」「ケンヂ一派」、ネーミングが安っぽくて古臭い。ともだちマークもいただけない。「ケンヂくんあ〜そびましょ」って言われてもねえ。ケンヂがいい男じゃないのも気に入らない。ケンヂの歌う歌も嫌い。スーダラ節じゃないんだからさ。あ、また文句ばかり言っちゃった！一言で言えば全然好きじゃない、ってことね。今までの浦沢直樹作品には大きな流れとは別のサイドストーリーがあってそこにジンときたりしたんだけど、これはそういう作りになっていない。そこも気に入らない。あ、また…。

